
心残りを見届けます

系

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

心残りを見届けます

【Nコード】

N1267BA

【作者名】

糸

【あらすじ】

「私の役目は、『死者の心残りを見届ける役目』です」「は？」

死者の心残りを見届ける役目をもった天使と見届けられる死者との交流。数話で一つのお話にしていくオムニバス形式の予定です。更新はまったり。*物語の性質上、生死にかかわる表現があります。もし何かご意見がある場合はご指摘ご指導していただくと幸いです。*

橋本日和の場合 1

どうやら俺は死んでしまったらしい。

どうして「らしい」なんて推測の言葉を使うかというと、俺自身は死んだという自覚がないからだ。

では、何故俺が死んだという情報をもっているのか。その理由は簡単だ。

「えーっと、橋本日にちかす和さん。27歳、無職。独身で一人暮らし。死因は交通事故による出血多量。これで間違いないですか？ 間違っていたら大変なので言ってお下さいね」

目の前にいる人物が先ほどからぺらぺらと一方的に話しかけてくる。その内容は確かに俺自身のことだが、肝心の「死亡」については何も分からないままだ。

そしてなによりも……。

「なあ」

「はい？」

「…お前、誰だ？」

「やだなあ、先ほど自己紹介したじゃないですか。天使ですよ、天使。英語で言うならエンジェル！」

……どうやら聞き間違いではなかったようだ。目の前の人物は俺の前に現れた時もそう言った。「自分は天使で、俺は死んだのだ」と。

じっと自称天使を観察する。

見た目は13、14歳ぐらいだろうか、日本人らしい黒髪黒目。

背丈は小さめで身体も細身。言えばガリガリだ。その身に白いワンピースを身にまとい、手にはバインダーとボールペンを持っている。足元は裸足で、一言で言えば異様な風態だ。

そんな少女に出会い頭いきなり「自分は天使で、貴方は死にました」なんて言われても信じられるか。

それが今の俺の心境だ。

だからその心境のまま無然とした顔で言った。

「あんな、オママゴトに付き合ってるヒマなんてないんだ。大人をからかうもんじゃない。どこの子だがしんないけど、もう小学生じゃないんだろ？ こんなふざけたことしてないで、学校にでも行けばいいだろ」

「あら、信じてくれないんですか？」

「当たり前だろ。つーか誰が信じるかつつーの」

「それじゃ仕方ありませんね。…ちよっと手を失礼します」

言うやいなや、いきなり俺の手をつかむ。何をするという前にふわりと浮遊感。

「なっ」

「んじゃ、行きますよ」

「まっ」

俺の言葉は発されなかった。すごい勢いで視界が後ろに遠ざかる。くらりと眩暈がした。目に映るのはすさまじいスピードの風景で、それと一つ一つ確認することなどできない。

そして、どれくらい経ったのだろう、おそらく数分ぐらいだろうが、俺の中では数十分にも思える時間だった。

「着きましたよ」

とん、と足の裏に堅い感触が伝わる。どうやら地面に降りたよう

だ。そこで俺はようやく「浮かんでいた」という言葉が頭に浮かんだ。ダジャレではなく。そのままずると地面に座り込んでしまひそうになる足を踏ん張って、少女を睨む。しかし少女はその睨みにひるむことなくすい、と手を伸ばした。

「そこに、貴方がいます」

「……………は？」

「どうぞ確認してみてください」

何を言っているんだ、コイツは。そんな思いを持ちながらも指された方に目をやる。

どきつと心臓が鳴った。

そして、ようやく気付いた。今自分がいる場所が「霊安室」だと。ここに来るのは、十数年前、親父が死んだ時以来だ。できれば、来たくない場所だ。

「…さあ、確認を」

無慈悲にと思えるぐらい、淡々とした口調で少女は重ねる。俺は激しく鳴る心臓を何とか抑えようとしたが、どうにもできない。やめろ、と俺の脳が叫んでいるのに、まるで命令されたロボットのようになっていると身体は動き、手はそこに寝かされている人物の顔にかかっている白い布をつまんだ。そして、ゆっくりと、そう、ゆっくりとその布を外した。

「　　っ！！」

そこには、俺がいた。青白い、まるで死人の様な表情で眠る俺がいた。

いや、ここが霊安室ということを見ると、ここで寝ている人物はすでに死んでいるということだ。

そして、寝ているのが俺だということだ。

ガンガンと、酷く頭が痛い。そして、その痛みが酷くなるにつれて、記憶が鮮明になっていく。

「ああ、そうだ。俺はあの夜、コンビニに寄った帰り、信号無視をしたトラックに突っ込まれて……」

そうだ、そうだそうだそうだ……！

照りつけるヘッドライト。周りの悲鳴。そして、一步も動けなかった俺自身……。

「っはあ……はあ……はあ……」

大きく呼吸をする。

その時、俺は気付いた。俺は今まで呼吸をしていなかったことを。この呼吸も口から出されるものは何もなく、俺自身が生前の習慣で呼吸らしき行動をしているだけだ。

手を左胸にあてる。そこから伝わってくるものは、ない。さつき感じた心音も、呼吸と同じ、俺がそう思っていただけ。おそらく、この頭痛も本当はないのだろう。だけど、生きていた時の俺の感覚が、まだ死を実感していない身体を動かしていたのだろう。

「……なあ、俺は、死んだのか？」

「はい。橋本日和さんは本日22時11分ごろ、某所で居眠り運転をしていた大型トラックに轢かれ、その後病院に搬送されるも23時21分に出血多量により死亡しました。そして今はその死亡時刻から27分後の23時48分……間もなく49分になりますね」

「そうか、俺は死んだんだ…」

無性に笑いがこみあげてくる。もつと悔しさとか憤りとかそういつたものを感じるかと思つたのだが、出てきたのは笑い。死の実感というのはこういつたものなのか。

「それで。お前、さつき天使つったよな。つーことは、俺を天国にでも連れてつてくれるのか？」

「いいえ。私の役目は死者の案内ではありません」

「は？ 天使つて死んだ奴を天国に連れていくもんじゃないのか？」

「その役割をもつ天使もいます。でも私の役目は案内ではありません
ん」

「んじゃなんだよ」

「私の役目は、『死者の心残りを見届ける役目』です」

「は？」

思わず間抜けな声を出してしまった。何言つてんだ、コイツ。

「なんだその『死者の心残りを見届ける役目』つーのは」

「その名の通り、『死者の心残り』を『見届ける役目』です」

「だから！ それは一体何なんだつー話だよ」

「…私のお仕事は、生前強い想いを持つていた人の、その想いの実現のお手伝いをし、結末を見届けることです」

「生前の強い想い…？」

「はい。人は何かしら生きている時に強い想いを持っています。それを叶える前に死んでしまった。つまり、心残りがあるわけですね。その心残りを解消し、気持ちよく新たな生を迎えてもらおうという神の考えによつてできた役目です」

「へえ、神様もなかなか粋なことをするんだな」

「そうじゃなかったら、俗に言う自縛霊になつてしまいますからね。そーなると色々とメンドーなので…」

さりと内情を暴露してるぞ、コイツ…。なんだか不安になつてきたぞ…。

「とにかく、私は橋本日和さんの心残り解消を全力で見届けますから！」

「見届けるって…手伝うことはねーのか？」

「時々あります。が、基本見届けるだけです」

「なんじゃそりゃ。思わず突っ込んでしまったが、天使はにこにこ微笑んでいるだけだ。」

「あ、ちなみに制限時間があります」

「制限時間？」

「はい。制限時間は死者が死を自覚してから24時間だけです」

「たった24時間かよ!？」

「はい。橋本日和さんの場合は…先ほどからですから今から24時間後の23時48分までですね」

「つーことは…」

「あと23時間41分です」

「……………」

時間はたっぷりあるというわけではない。俺は知らず手を握りこんだ。

「……………それじゃあ残り時間、よろしくな」

「いちちらこそ」

天使の微笑みが返ってきた。

橋本日和の場合 1 (後書き)

勢いで始めました。

(20120103)

橋本日和の場合 2

「まずはここからっ」と

「……………」

「何だよ、なんか不満でもあるのかよ」

「いえ、貴方の心残りの解消を見届けるのが私の役目なので……」

「ならんな顔すんなよ」

俺の心残りなんだから俺が一番よく知ってるじゃねーか。なのに
コイツときたら……………。

「お、出る出る。さっすが新台、いい調子じゃねーか」

けたたましい音。それに紛れて喜んだり悔しがったりする人の声。
それに負けないようにと響くアナウンス。

今日はこの店はちょうど新台入れ換えの日だった。そのため、開
店時間よりもかなり早くから人の列が出来ていた。俺は昨夜、霊安
室から一度自分の住んでいるアパートに戻り、家にあつた現金を持
つてこの店に並んだ。

そして開店と同時に他の客と同じように一斉に店内になだれ込む。
手早く台を確保し、玉を交換して打ち始める。最初はなかなか流れ
に乗れなかったが、徐々に当たるようになり、いまでは足元に3箱
できている。元手を考えるとかなりの儲けだ。

「……………」

「っ……………！ ンだよさっきから！ ずーっとシケた顔してんじゃね
ーか」

「いえ、貴方の心残りを見届けるのが私の役目なので……」

「それさっきも聞いたっつーの。なんならやってみるか？」

「私がやると、勝手に台が動いていることになりませんか？」

「……それは軽くホラーだな」

そうだった。コイツは俺の目には見えるが、他の奴には見えないようだ。俺は24時間の間は今までの人間のように（といても心臓は止まっていないし呼吸もしない）人に見えたり物に触ったりすることが出来る。だが、天使のコイツは俺みたいなヤツにしか見えな
いようだ。

それに気付かなかった俺は並んでいる間激しい独り言を言っている変な奴と周りから見られていたらしい。早く言えよ、と言ったのも数時間も前の話だ。

「んじゃとりあえず、そこで俺の姿を『見届けて』くれよ。見てろよ、今にこの箱を倍にも3倍にもしてやるよ」

「……………はあ」

生気のない返事だった。もしかしたらそれはため息だったのかも
しれない。俺はそれに気付かないフリをして、ひたすら玉を打ち続
けた。

「つあ〜畜生！ あそこでやめときゃ……」

数時間後、俺は結局すっからかんで店を出た。勝負とは引き際が
大事だと言われていたが、調子に乗っていた俺はどうやらそれを見
逃したようだ。最高5箱まで積み上げたが、結局全て失った。つい
でに財布すっかすかになっている。

「あそこで……あそこでやめておけば今頃……」

ついてない。非常についてない。まあ、もうこの世とおさらばす
るのなら金なんて持っ
ていても仕方がねえが、それでも悔しい。あ
んなにいい感じで打てたのは今までなかっただけに、だ。

「なあ天使。こうぱーっと金出てくることってねえのか？」

「私は万能ではありません。無から有を生み出すことはできません

よ

「だよなあ。まあ、別に金儲けしたいわけじゃねえし」

「ならなぜ、あんなものしたんですか？」

「あ？ そりゃ単純。今日が新台入れ換えの日だったからだよ」

「……なぜ？」

「なぜって……、新台の日は設定が甘くなる。それを狙ってわざわざ遠くからやってくる奴がいるくらいだぜ？ 行かないやならんだろ」

「分かりませんねえ。それじゃ橋本日和（にちかず）さんは『遠くからたくさん人がくるような日だから行く』ってことを理由にしていますよね」

「……………」

「お金儲けがしたいわけでもなく、単純に打つのが楽しいわけじゃない。そこに人がたくさん集まるから自分も行くって感じですね」

「……………」

違う、と何故か言えなかった。天使の言っていることを認めれば、ひどく自分が空しい人間に思えるのに。単純にここは笑いながら「打つのが楽しいから行ってんだよ」と言えばいいだけなのに、何故かその言葉が口から出てこない。

じいっとその黒い瞳に見つめられると言葉が出ない。日本人が持つ、黒い瞳。大きなそれはまるで死神の目のように思えた。

「それにしても、これが貴方の心残りではなかったようですね」

「……………なんでそんなこと分かんだよ」

唐突に話題転換されて一瞬反応が遅れる。しかし、今はその流れがありがたかった。あのまま彼女の目を見ていると、空恐ろしい事が起こりそうな気がしたからだ。

「心残りを解決した後、その人は幽体に戻ります。あ、幽体というのは先ほどの橋本日和さんの状態ですね、死を自覚する前の。それがか残り解消の合図なんです。でも、今の橋本日和さんは未だ肉体をもったまま。それはつまり、先ほどの行為が貴方の心残りではなかったということを示しているんです」

「…つーことは、俺は無駄な時間を過ごしたと言つのか？」

「極端に言えばそうですね」

「なんだよそれ！ 違つならもつと早く言えよ！ という言葉は寸でこのころで飲み込んだ。きつとやり切らなければ結果は出ないんだろつなと考えたからだ。むつと唇を引き結んで次の「心残り」を考える。

「でもよ、これ以外に心残りなんざ心当たり、ないぞ」

「それはあり得ません。必ず心残りがあるはずです。それを思い出してください」

「心残り、なあ…」

あごをさすつてみても何も思い浮かばない。

「パチンコじゃなきや競馬か競艇か競輪か…。だけど別にこれといったタイトルがあるわけじゃねーし…。宝くじの当選、はそもそも買つてねえよな…」

やっぱ何も思い浮かばない。

「俺には心残りなんて殊勝なモン、ねえんじやないのか？」

「いいえ、それはあり得ません」

きつぱりと天使が言いきつた。

「必ず、必ずあります。橋本日和さんだけの『心残り』が」

じつと見つめられる。先ほど感じた恐怖は、ない。同じ瞳なはずなのに、今度の瞳は澄んだ真摯な想いが伝わってくる。

その想いに応えようと思いをめぐらすも、やはり何も思い浮かばない。

「…やっぱねえよ。考えてみるよ。27歳のいい年した男が結婚もしてなければ定職にも就いてない。そんな男が天使をも動かす心残りなんざ持つてねえんだよ」

「……………」

自嘲気味に言えば天使が悲しそうな表情をした。だが、俺にはど

うしてやることもできない。大学を卒業して就いた会社とは反りが合わず、たった一年で辞めた。生きるためにバイトやその日限りの職に就いてはいた。だけど定職に就こうという気力はなかった。そここうする間に不況になり、今度は定職に就けなくなった。全く馬鹿な話だ。

恋人がいればまた話は別だったんだろうが、生憎学生から付き合いっていた彼女とは俺が仕事を辞めると同時に終わった。彼女はその後同じ会社のエリートと結婚したと共通の友人から後で聞いた。多分、それが正解なんだろう。所詮男女の付き合いなんてそんなもんだ、金銭が絡むとシビアになって当然。彼女だつて将来さきの見えない男よりも将来安定の男の方がいいに決まっている。

……な、考えてみる。こんな男に心残りなんてあるのか？

天使をも動かすような、心残りが。

「さ、てことでこんな時間勿体ない。残り時間ではーっと遊ぼうぜ」
「橋本日和さん…」

悲しそうな天使の表情を見て、正直胸が痛む。この感覚も俺の生前の記憶なんだろうが。こんな顔をさせているのが俺だと思つと情けない。せめて喜んでもらいたいと、天使の腕をとつた。

「橋本日和さん？」

「今日は幸い平日。遊園地も空いてるだろ」

「ええっ？」

「入場券ぐらいならなんとかありそうだ。今から遊園地行って遊ぼうぜ」

「ちょ…」

何か言おうとする天使の言葉を遮るようによく腕を引っ張っていく。

それがせめてもの償い。
あんな悲しそうな顔をさせた、俺の償い。

橋本日和の場合 2 (後書き)

何かあれば、ご意見ご指摘のほどよろしくお願いします。

(20120103)

橋本日和の場合 3

「どーだ、楽しかっただろ」

「はあ……」

生気のない返事だな、全く。でも遊んでいる間は楽しんでいたよ
うだからよしとするか。

「それにしても、ジェットコースターで落ちそうになったときはホ
ント驚いたぜ」

「まあ、私自身宙に浮かぶことができるんで実際に落ちるとい
うことはないんですが」

「そりゃそうかもしれないが。アンタが生身の人間に見える俺とし
てはかなり冷や冷やモンだったけどな」

「ああ、それはそうかもしれないですね」

しれっと答える天使。ちくしょー、アンタにとっては慣れた光景
かもしれないけど、初めて死んだ俺にとっちゃかなり新鮮で今まで
の常識を覆すようなことなんだよ！

「でも楽しかったですよ。こういう場所には来たことがないので
……」

「まあ、天国にはなさそうな施設だよな」

「……………」

天国はこういった娯楽がなくても何か花畑みたいなものでふわふ
わできそうだし。そもそも天使つーのは空飛べるからそれでも
毎日がジェットコースターだよな。うん、我ながら酷い出来だと思
うよ。

「あー、もうこんな時間か……」

園内に掲示されている時間を見て呟く。

約束の24時間まであと5時間。閉園時間までまだあるが。

「さて、次は何を乗る……」

その時、隣を歩いていた女性が躓いた。反射的に手を差し出してその身を受け止める。

「だ、大丈夫ですか？」

「ああ、ごめんなさい。助かりました」

「いえいえ。…ここ、ちょっと段差があって危険ですよね」

「そうね。ちょうど暗くて気付かなくて…。本当にありがとうございました」

「いえいえ」

「おかーさん！」

そんな会話を交わしていると俺と同じか、それよりいくつか下くらの女性が急いでこっちに駆けてきた。

「もう！ 人様に迷惑をかけて。すみません、母が何か？」

「いえ、躓かれそうになっただけですよ」

「それをこの人に助けていただいたの」

「もうそろそろ年なんだから！ 本当にすみません、ありがとうございました」

「大丈夫ですって。…お二人でここに？」

「はい、娘が今日仕事休んで連れてきてくれたんです。私の誕生日プレゼントとして」

「な、何言ってるのよ！？ …えっと、母が年甲斐もなくここに行きたいと言ったので…」

「それは親孝行な娘さんですね」

「ええ。本当に」

「もう、余計な事言わないの！ パレード始まっちゃうし、そろそろ行くよ」

「はいはい。ありがとうございました」

「ありがとうございます」

母娘は二人して深々と俺にお辞儀をして急いで行った。そういえばもう少ししたらこの遊園地でも見物のパレードが始まる。いい場所を観るためにはそろそろ場所取りもしなければならぬだろう。

「……仲の良い、母娘でしたね」

「だな。俺と違ってよくできた子だよ」

「橋本日和さんにはお母さんはいないのですか？」

「いや、いるよ、里にね。ま、もうずーっと会ってないけど」

「なんで？」

「なんでって……。折角大学まで出させて就職したのに、その会社を一年で止めてしまう息子だぜ？ おまけに新たな職に就かずにふらふらしてる奴が、どの面下げて帰ることができるかっつーの」

「会いたいと、思わないの？」

「……………さあ、な」

「……………」

ああ、また天使の瞳が陰った。すごい罪悪感。だが、こればかりは仕方がない。

「俺も今の娘さんみたいに素直だったら、おふくろに苦労かけなかつたんだろっけど」

「今日は何の日？」

「んあ？」

「橋本日和さんにとって、今日は何の日？」

唐突に、天使がそう言ってきた。

「何の日って……。特に何も無い日だけど……。ああ、強いていうなら死んだ翌日？」

「バカ！ そんな日じゃないよ！ ねえ、よく考えて。貴方の……」
橋本日和の『心残り』を！

俺より小さい奴に馬鹿と言われた。だけどそれよりも必死な彼女の様子がなんだか切なくて。辛そうで。苦しくて。

何の日だ。今日は俺にとって、何の日だ。

きつと祝日とか大きな規模のイベントがある日じゃない。それは「橋本日和のためだけ」じゃない。

じゃあ、何だ。俺だけの、俺にとっての特別なイベント……。

『誕生日プレゼントとして』

「誕生日…」

ぴくり、と天使の方が動いた。

「誕生日、でも俺の誕生日じゃない。じゃあ誰の…」

『母が年甲斐もなくここに行きたいと言ったので…』

「母親の、誕生日」
ずきん、と頭の奥が痛くなった。そしてそれと同時にすーっと頭の中がクリアになった。

『誕生日プレゼント用ですか？』

『は、はい、まあ、一応』

『リボンのカラーはこちらとこちら、二種類ありますが…』
『母親なんで、こっちの落ち着いた色で』

『お母様に。なんて親孝行な息子さんなんでしょう』

『いや、別にそんなもんじゃ…』

「橋本日和、さん…?」

「…たよ」

「え」

「思い出した、よ。俺の『心残り』を」

「橋本日和さん!」

「今日は、おふくろの誕生日なんだよ。そう、俺就職先が決まって、それを電話で知らせて…。そしたら、今日がおふくろの誕生日だつてこと思い出して…。ガキの頃以来ぶりにプレゼントなんか用意して…」

次々と記憶がよみがえってくる。

今更母親に何かプレゼントするなんてくそ恥ずかしい。だけど、何年も連絡一つよこさなかった親不孝者の俺の電話に付き合ってくれて、俺の就職を喜んでくれた。俺の就職を喜ぶ前に俺の健康を気遣ってくれた。

思い返せば中学のときに親父を亡くして、それ以来女で一つで俺を育ててくれた。それなりに悪い事もしたけど、けして見捨てず、たまには拳をもって俺を真っ直ぐにしてくれた。身を削って溜めたお金で大学まで行かせてくれて、就職した時は辛い家計の中からスーツ一式を買ってくれた。

なのに、俺は自分の都合で勝手に会社を辞めて、顔向けできないから連絡を一切断って、好き勝手生きてきた。

「だけど、いつもおふくろは俺のことを考えてくれていた……」

電話越しで聞いた声は記憶の声よりも老けていた。多分、変わらずあくせく働いているんだろう。親不孝な息子のことを考えながら、

自分は贅沢せずに働き続けているんだろう。

「そんなおふくろに俺はネックレスを買ったんだ。安いモンだけど。一応金と小さなダイヤがついたもんを」

ぐっと手を握り締める。その手の上に、そっと天使の手が重ねられた。

「間に合います。まだ、間に合います」

「何が……」

「貴方の……橋本日和さんの想いを、お母さんに届けることです」

「もう、無理だ。ここから里までがんばっても三時間はかかる」

「大丈夫です。私を誰だか、忘れてませんか？」

「……天使……」

ふわりと、天使が微笑んだんだ。そして、ぎゅっと俺の手を握った。

「そう、私は天使。『死者の心残りを見届ける』天使ですよ。……必ず、貴方の心残りを見届けます」

そう言って天使はふわり、と空を飛んだ。

俺もそれに連れられて、一緒に空を飛んだ。

橋本日和の場合 3 (後書き)

次でラスト…。

(20120103)

橋本日和の場合 4

「おい、ここって…」

「そうです、橋本日にぢかす和さんの住むアパートです」

「そりゃ知ってるって。だけど、こんなところにおふくろが…」

「まずは中に入りましょう」

強引に会話を打ち切ってドアノブを指さした。全く、意味がわかんない。時間がないって言うているのに、この天使は！

それでも中に入らないことには話が進まない。俺は一分一秒が惜しい身だ。やや荒々しい手つきでドアノブを握り、ドアを開けた。

「あれ、明るい…」

「……………日和」

心臓がはねた。

懐かしい声。

ついこの間、携帯越しに聞いた声。

一番、聞きたいと思っていた声

「なんで日和が…」

「お、ふくろ…」

俺の部屋にいたのは紛れもないおふくろ。数年会っていなくても見間違えるはずがない、おふくろだった。

少し痩せたかな。髪に白いものも目立っているし。何となく、小さくなった気もする…。

「日和、だよね…」

「……………ああ」

「ああ！ 母さん心配したんだよ！ お前が…お前が交通事故にあつたって聞いて…」

それを聞いてどこか冷静に納得した。そうか、俺が死んだって連

絡は当然のようにおふくろの所に行ったんだよな。そしてそれを受けてこうしておふくろはやってきたってことか。

「この…馬鹿息子が!!」

「痛っ!」

「勝手に連絡断って! かと思えば勝手に連絡してきて! おまけに……おまけに、母親より先に死んでしまうなんて……!!」

「おふくろ……」

「親はね、子より先に生きて先に死ぬんだ。それが世の理ってものだ。なのにお前ときたら……! 本当に、馬鹿息子だよ。最後の最期まで、親に心配かけるんだからね」

「おふくろ……」

おふくろは泣いていた。ぼろぼろぼろぼろ、泣いていた。

今まで一度だっておふくろが泣いた姿をみたことがない。親父が死んだときだつて気丈に振る舞っていた。でもあれは単なる威勢だつたつてこと、分かっている。俺に不安をかけないよう、俺を寂しからせないよう、母親として胸を張っていたんだつて。

そんなおふくろが、今泣いている。涙をぬぐおうともせず、鼻水まで垂らしている。

「おふくろ……ごめんな……ごめんよ……」

「謝るぐらいなら死ぬんじゃないよ。本当に……本当に……馬鹿息子……」
「うん、うん」

二人して泣いていた。俺も泣くのはいつぶりだろう。大人になればなるほど、泣くことが恥だと思ひ泣かなかつた。仕事を辞める時も彼女と別れた時も、俺は泣かなかつた。泣くほど、執着があつたわけでもないのだろう。

「ただ、俺は今泣いていた。それこそ、おふくろと同じ。涙をぬぐおうともせず、鼻水まで垂らしている。」

「いいかい、あの世にいったら父ちゃんに思いつきり殴ってもらいな。正座して説教してもらおうんだよ」

「親父の説教長いんだよ」

「当たり前だよ！ あの人はアンタのことを一番に考えているんだからね」

「おふくろと同じように」

「もちろん。子どものことを考えない親がいるかってんだ」

にかつと笑った。涙と鼻水でぐちゃぐちゃな顔だったけど、俺には綺麗に見えた。本当に、綺麗に見えたんだ。

「そつだ、おふくろ。これ……」

俺は思いだして無造作に置いてあつた紙袋を手取る。そしてそれをお袋につきだした。

「何だい、これ」

「プレゼント。……誕生日、おめでとう」

「誕生日……」

「今日、おふくろの誕生日だろ？」

「そついえば……。アンタ、よく覚えていたね」

「そりゃ息子だからね」

おふくろは大きく目を見開いたのちに「よく言つねエ！ きつと直前まで忘れてたんだろ」と憎まれ口を叩きながらも嬉しそうにプレゼントを受け取ってくれた。

「お前、もしかしてこのために幽霊になつちまつたんか？」

「んー、なんか俺も全部分かつてないけど、今日一日……24時間だけ生き返らせてもらつたんだ」

「誰に？」

「天使にだよ」

後ろを振り返つたがそこに天使はいなかった。一体どこに行ったんだと思つても、今はおふくろのほうが優先だ。再び身体を元に戻す。「へえ」。私も大抵長い事生きているが、世の中まだまだ不思議があるもんだねえ」

「俺だつてそう思つたさ」

「そうかい。……24時間で、あとのくらい」

「あと……。5分」

室内唯一の目覚まし時計に視線をやると、天使の言っていた時間まで残り5分を切っていた。ああ、もう5分しかないのか、そう思うと最初の時間の浪費が酷く腹立たしい。

「そうかい。そう時間もないってことだね」

「ああ」

「それじゃ私から言うことはただ一つ。アンタは馬鹿で阿呆で手のかかる息子だったけど、私の、最高の息子だよ」

「……………」

「今でもアンタのこと、胸張って自慢の息子だって言える。それを忘れないことだね」

「おふくろ……」

もうこれ以上涙なんて出ないと思った。だけど、涙は後から後から流れ落ちる。

「俺も……。おふくろは口汚くてすぐ手が出て怒る時は容赦ない鬼みたいな奴と思ってたけど……。自慢の母親だよ」

「あつたり前だよ。なんせ私はアンタの母親だからね」

ああ、全く敵わない。昔からこの人には敵わない。

だから、なかなか顔向けができなかった。本当はすぐに会いたかった。だけど、会えなかった。会うのが怖かった。もしこの人に俺のことを否定されたら、俺はそれで生きていけない。

ふと、何か暖かい風が触れたような感じがした。

「あ……………」

その部分を見ると、少しずつ少しずつ、身体が透けていく。時計を見ると、時間まで残り1分だった。

そうか、これが終わりの時なんだ。

「日和……」

「おふくろ。今までありがとう。先に死んじまってごめん。親父と二人で待ってる。だけど、あんま早く来んじゃねーぞ？ ちゃんと天命を全うしてから来いよ。いいな」

「子どもが親に説教なんてするんじゃないよ。……… ゆっくり、休みなさい、ね」

「ああ。………ありがとう、な」

最後の言葉を言ったその時、俺の意識は消えた。

24時間が終わったんだ。

「天使、ありがとう」

「いえ、これも仕事なんで」

「俺、もう少し早く気付けばよかったのかな……」

そうしたら、こんな終わり方じゃなかったかもしれない。そんな考えがちらりと頭をよぎる。

「何言ってるんですか。貴方達母子、離れて暮らしていても心はずっと繋がっていたじゃないですか」

「心は繋がっていた……？」

「はい。二人ともまああるい、あつたかい心がきちんと繋がっていましたよ」

にっこりと天使が微笑んだ。

「そっか…。天使が言うなら、折り紙つきだな」

「そうですね。天使は嘘つきません」

「そうだよな。……ここでお別れ、か？」

「はい。私の役目はここまでです。もうすぐ、橋本日和さんを天界に連れてくる役目の天使がやってきます。そこで引き継ぎをしてお別れです」

「そっか。……なあ、最後に一つだけ、聞いていいか？」

「何ですか？」

「『天使の名前』」

すると天使はにっこりと　　今までで一番の笑みを見せた。

「私は『死者の心残りを見届ける役目』を負った『天使』です」

「いや、そうじゃなくて、アンタ固有の名前…」

「あ、引き継ぎの天使がやってきましたよ」

もう一人の天使が俺たちの方へやってきた。その天使とこの少女が二人で何やら話を　おそらく俺の引き継ぎ内容だろう　をして、そしてもう一人の天使が俺の手を微笑んでとった。

「橋本日和さん、お待たせしました。それでは行きましょう」

「いや、俺はまだ聞きたいことが…」

「橋本日和さん、お元気で」

「てん…」

言葉を続けようと思ったがそこで途切れた。強い浮遊感に襲われ、俺はそのまま意識を失った。

「……これで私の役目はおしまいですね。さて、次の対象者は…」

少女はどこから取り出したバインダーを手にした。そこには新たな対象者の名前やデータが記載されていた。

「把握しました。それでは、お仕事がんばりましょう」

そして少女の姿は光の粒子となって消えていった。

橋本日和の場合 4（後書き）

以上でお終いです。また何かネタがあればこういった感じで書いていこうかと思えます。

今までに手掛けたことのない内容ですので、忌憚なきご意見をいただけるとうれしいです。

ここまでお付き合いして下さい、ありがとうございました。

（20120103）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1267ba/>

心残りを見届けます

2012年1月3日01時52分発行